



コメント Comment

塚田報告へのコメント

栄原 永遠男

私は、市大が大阪市にあり、市が作った大学であることを重視し、出発点とすべきだと考えています。大阪という都市が、どのような性格の都市であるのか、どのように都市形成されてきたのか、という点を、政治・経済・文化・思想等の諸方面から多面的に研究していく必要があると考えます。

もちろん、このような研究の蓄積が山ほどあることは承知しているつもりですが、歴史と文学とが共同で研究することにより、また、国際比較研究により、新しい観点を引き出していけないでしょうか。

西宮の例ですが、江戸時代に吉田という豪商がおりました。これが吉田零濤閣という文庫を造って、古代以来の雑多な文物を大量に集めました。それを私は使って研究しています。この吉田家にあっては、経済と文化が融合している。あるいは、文化が経済を引っ張っていつている、といえると思います。

このような例は枚挙にいとまがなく、むしろ普遍的なあり方だと思います。おそらく日本だけでなく、世界的にもそうでしょう。経済だけが、文化だけが、他から独立して動いているというようなことは、たぶんないと思えるべきだと思っています。このことは、政治についても、たぶん言えるでしょう。

都市の住民構成や都市の地理的構造、経済構造、都市の周縁的住民の存在など、基礎的なことをおさえなければならぬのは言うまでもありませんが、それをおさえたと、COEの共同研究としては、政治と文化、経済と文化の相互関係、相互規定に焦点を当てていくのがよいのではないかと考えています。

以上のことをふまえて、中近世中心でよいと思いますので、大阪とアジアや世界の都市との比較研究を行ってはいかがでしょうか。そのための切り口として、今回は「港市」の概念を出してみました。「港市」の概念は多様ですが、国際的な文化交流、国内的な文化流通の基地としての側面を重視していくのが重要だと思えます。

中世都市史研究者から見た、近世都市史研究の「潮流」

仁木 宏

塚田氏は今回の報告の中で、『都市社会史』（山川出版社、2002年）においては、「都市性」、「社会＝空間構造論」、「分節構造」、「伝統都市」という四つの視点が共有されているとした。しかし、この四視点は、同書の「序」（佐藤信・吉田伸之執筆分）で強調されているものの、個々の論文（特に中世史）では必ずしも意識されているわけではない。さらに塚田氏は、これら四視点に立脚することが「近世に限らない段階」にあるとの理解を示したが、筆者とは見解を異にする。少なくとも、中世都市史研究においては、塚田氏が言うような意味において、これら四つの視点を基盤においた研究は皆無に近いし、そうした視点が有効であるとは必ずしも認められていない。

では、これら四視点は、卓越した視点といえるのであろうか。

たとえば、主要な「伝統都市」として都城と城下町をあげるだけで、中世に展開した多様な

都市（中世京都、堺、門前町、寺内町、市町など）の存在は事実上、無視している。このことは、中世に「都市性」が存在した場として、惣村と武士館しか提示しない姿勢にも一貫している。「社会＝空間論」が「社会的諸関係から空間を解く」方法であるとするならば、中世史における都市空間論の方がより多様で、豊かな可能性をもっていると考ええる。すなわち、中世都市史においては、絵図や法といった「認識」の世界がかたちづくる「空間」も積極的に検討対象としているし、人的ネットワークそのものを都市空間とみなす議論も展開している（仁木編『都市』、青木書店、2002年参照）。

すなわち、『都市社会史』の示した四視点は、日本の都市史研究に汎用されるべき優れた視点とは、必ずしもいえないだろう。

では、この四視点に集約されるような都市史研究の視角は、近世都市史研究において普遍的であるといえるのだろうか。

塚田氏は、近世都市史研究における1980年代（「第三の波」の時代）は都市住民論を社会関係論として読み解いた時代、90年代（「第四の波」の時代）は分節構造論が採用され、「売」の諸形態や多様な都市性が解明された時代であるとした。

こうした都市史研究は三都（江戸・大坂・京都）や一部の大規模城下町（仙台など）で展開されているものの、これらの視点とはほとんど関係なく、地方の城下町や在町に関する膨大な研究が毎年、生み出されている。塚田氏が「第三の波」「第四の波」と総括した潮流は、『年報都市史研究』などの雑誌や、一つの科研メンバーとして結集している研究者の中で主導されている研究動向にすぎないのではないかと。広く日本各地で近世都市を研究している研究者の志向をどれだけ広範に反映しているといえるのか、疑問なしとはしない。ちなみに、筆者も、戦後、中世都市史研究の流れを「第一の波」「第二の波」などと総括したことがある。その中で、最近の「第三の波」として、全国各地の文献・考古学研究者の学際的研究動向をとりあげたが、これはかなりの程度、普遍的な中世都市史研究の潮流把握になっていると考える（仁木『空間・公・共同体』青木書店、1997年）。

四視点のうち「分節構造」論についてふれておきたい。この議論は、集団と集団の個々の関係性に注目するあまり、都市全体の骨格を不明にしていると考ええる。そのため、(1) 近世城下町に厳然と存在する、城郭、家臣団屋敷、町屋地区という〈中心－周縁〉の関係を支配－被支配の問題として読み解こうとしない、(2) 近世の中で、あるいは近代へ都市がどのように展開してゆくのか、あるいはその変化の要因が何なのか説明できていない、(3) 都市の問題を国家論の中に位置づけえない、などの問題点をはらんでいる。ちなみに、中世都市史研究においては、たとえば、中世末から近世初頭にかけての都市（京都、城下町、自治都市などをふくむ）の全体的な変化を、都市における社会的矛盾関係とその体制的総括として論理展開している。

以上、日本中世都市史研究者から見た、近世都市史研究への「注文」を述べさせていただいた。本COE研究においては、こうした日本史学界における、中世史と近世史の「断絶」ともいえる状況を克服するとともに、都市史研究の方法論の相互交流を通じて、実りある「比較都市研究」を実現してゆきたい。

六朝都市文化史研究の可能性

—塚田報告へのコメントに代えて—

中村 圭爾

ここで筆者に本来求められているのは、塚田報告についてのコメントである。しかし、以下に述べるようないくつかの理由によって、標題のような小文を記すことでそれに代えたいとおもう。

塚田報告は、中国六朝史を専攻する筆者のような門外漢にとって、きわめて刺激的であり、示唆に満ちていた。しかし、その内容について、筆者の立場から、この場にふさわしいコメントを行うことは容易なことではない。まして、報告に即して、ないしはそれに触発されつつ、「比較都市文化史研究」の枠内で自らの専攻に関わる研究の方向性を呈示するという、当初もくろ

まれていた研究会の目的をこの場で果たすことは不可能にちかいものごとである。そのことは、塚田報告と中国六朝史研究の対象や史料を単純に比較するだけで、容易に理解されるであろう。さらにいえば、「比較都市文化史研究」なる概念で括られうる、そして塚田報告から触発されるとき研究実績は、中国六朝史においていまだ存在しないといわねばならないからである。

そうであるとはいえ、塚田報告が刺激的であり、示唆的であったのは、氏が「都市における社会＝文化構造史」と概括されたその発想に、筆者が専攻する中国六朝における都市文化史に通底しうる可能性を見出せるのではないかという予感がえられたからでもあった。そのようなことについて、若干の思いつきを述べてみたい。

六朝都市史研究には、これまでいくつかの論点がある。その一つは、漢唐間における都市の発展、とくに唐都長安で完成を見たとみられる首都の全体構想、すなわち宮城・街路・街区・市・宗教的施設などの配置と、その配置原理の成立過程に関する問題であり、陳寅恪の古典的著作『隋唐制度淵源略論稿』がその発端といえる。また一つは、当時の個別著名都市についての研究で、洛陽・平城・建康・鄴などが、主としてその地理的位置、立地条件、平面配置などから分析されていて、その成果は少なくない。この方面では、近來の考古学的調査がたとえば洛陽・鄴などについて、従前をはるかにしのぐ研究資料を提供している状況にもある。

これとは別に、当時の先鋭的または指導的文化現象が、主として都市に見られること、またその担い手が都市居住の貴族とよばれる存在であることから、都市と文化を関連させた文化的視点が文学・思想・宗教などの分野の研究で影響力を維持している。ただし、それらはいくまで当時の上層知識人各自の、個人としての文化的営みととらえられ、いわば具体にして特異な事象と認識される傾向がたつよくあった。それゆえにまたそれらの歴史的立場づけにおいて克服すべき限界を有していたとせざるをえない。

塚田報告でえられた示唆のうち、とりわけ魅力的であったのは、都市社会史をふまえて「都市文化」を考えるとという方法である。矮小化のそしりをうけることを承知のうえであえていえ

ば、この点にこそ、六朝都市文化史研究のある可能性を見出しえよう。もちろん、六朝都市研究において、「社会史」が可能なるほどには、六朝史研究は成熟しておらず、なにより史料の点で大きい限界がある。にもかかわらず、正史はもとより、『洛陽伽藍記』『水経注』『建康実録』などの零細な記事のなかから、当時の大都市洛陽・建康における社会集団やその社会的関係、文化の保護者、文人存在などを抽出し、塚田報告に学びながら考察をすすめれば、前述のごとき六朝都市史研究にあらたな地平を拓くことができるのではないかと思いついた次第である。

ただ、この場合、対象となるべき都市はおそらく華北の洛陽・江南の建康にほとんど限定されよう。そこに都市社会とでもいうべきものが存在するとして、以上のような研究にあつては、その社会が六朝時代全体の歴史性といかに関わるかの認識が、六朝史研究では当然のように要請されるであろう。このことを考慮せずして六朝都市文化史研究は成立しうるか、それは別途熟考すべき問題である。

比較都市史におけるコンスタンティノープル— 比較都市文化史研究チーム塚田報告によせて—

井上 浩一

1) COE 研究拠点「都市文化研究センター」の設立と相前後して、同センターの研究チーム「比較都市文化史」の事業推進担当者による日本都市史に関する著作が続けて 2 冊刊行された。1 冊は塚田孝『歴史のなかの大坂—都市に生きた人たち—』(2002 年 9 月、岩波書店)で、もう 1 冊は仁木宏(編著)『都市—前近代都市論の射程—』(2002 年 11 月、青木書店)である。

塚田氏の著書は、古代から近世までを扱っているが、大阪の歴史的特質を反映して中世についての叙述はわずかである。仁木氏の編著書は、一部古代史の論文も含まれるものの中世を中心とし、しかも大阪ではなく京都を主たる対象と

している。対象とする地域・時代の相違にもかかわらず、それぞれが指摘する課題や方法論には共通点が多い。塚田氏の提唱する「社会＝空間構造の分節的把握」は、仁木氏の説く「空間認識」の問題や「多様な都市住人」とそのネットワークと重なる点が多いように思われる。両者の問題意識の重なるところは、いわば日本都市史研究の最先端であり、本研究チームの中心的な研究テーマとなるものと筆者は考える。

視角や方法論の共通性にもかかわらず、前近代日本都市史の大枠については、両氏のあいだでは見解の相違があるようで、第1回の研究会(2002年12月25日)でもその点が議論となった。塚田氏は吉田伸之氏の「日本型伝統都市類型」¹⁾にもとづき、前近代の都市の典型として都城(古代)と城下町(近世)を挙げ、このふたつの類型を同一場所でもった大阪の日本都市史における重要性を指摘する。これに対して仁木氏は、吉田氏の提起に真っ向から反論して、中世都市の多様性を強調し、中世こそが都市の時代であったとする²⁾。仁木氏の指摘のように、見解の相違が日本中世史と近世史の研究交流の不足によるものとすれば、日本史の各時代はもちろん、筆者も含めて外国史研究者、さらには海外の研究者も加わる本研究チームが持つ意義はきわめて大きいといえよう。

2) 日本前近代都市史研究に学びつつ、比較史的な観点からコンスタンティノープル(現イスタンブール)の特質を明らかにすることが、本研究チームにおける筆者の課題である。千年の都という点からは京都との比較が考えられるが、港市ないし商業都市という点では大阪との比較も有効であろう。あるいは、近世オスマン・トルコ帝国時代にまで視野を広げるなら、江戸との比較も興味深い。いずれにしてもコンスタンティノープルは、本研究チームの課題のなかで重要な位置を占めると筆者は考える。具体的な比較研究に先だって、この町の古代から中世への歴史を簡単に紹介しておきたい。

周知のようにコンスタンティノープルは、330年にコンスタンティヌス1世(在位306～37年)によってローマ帝国の都とされた。これによって一地方都市(ギリシア名ビュザンティ

オン)が地中海世界帝国の都となったのである。実質的な都となるにはなお時間がかかったが、少なくとも4世紀末～5世紀初までに首都にふさわしい設備が整い、ユスティニアヌス1世(在位527～65年)時代には、数十万の人口を抱える当時の世界最大の都市であった。

5～6世紀のコンスタンティノープルは、地中海帝国の富が流れ込む「パンとサーカス」の消費都市であった。競馬場の中央に立つエジプトから運ばれたオベリスク、ゼウクシッポス大浴場を飾ったイタリア・ギリシアの彫刻はその象徴である。市民に配給される「パン」となる穀物を陸揚げする港が整備され、港地区には大型の穀物倉庫が建設された。大浴場の水を確保するため、大規模な水道と貯水池が作られた。多数かつ多様な人々が流れ込む都は、不定形な群集からなる大衆社会をなし、M・ウェーバーのいうところの古典古代都市の団体的性格は大きく変質した。この時期のコンスタンティノープルは、都城(宮都)という概念には収まりきらず、「帝都 metropolis」³⁾という特殊なあり方をもったと考えられる。この点については、日本や中国の首都と比較しつつ、さらに検討したい。

ユスティニアヌス1世以降、コンスタンティノープルはいったん衰退する。「パン」の廃止(618年頃)、水道の破壊(626年)は、「パンとサーカス」の時代の終焉を語っている。7～8世紀前半には人口が激減し、中心部にも耕地が広がるようになった。日本史における「都城の農村化」に対応する現象であろうか。

コンスタンティノープルが再び繁栄に向かうのは8世紀半ば頃である(766年水道の修復)。中世における新たな発展は商工業都市という側面に負うところが大きいように思われる。都市の性格の変化は穀物の流入形態にも現れている。帝国支配体制は再建されたものの「パン」は復活しなかった。穀物は租税ないし地代という直接的収取よりも、市場経済を通じて商品として流入するようになった。国家による穀物取引への統制は例外的な現象となり、港に付随していた大穀物倉庫も姿を消した。このような変化が、都市文化のあり方などにどのように反映したのか、これも興味深いテーマである。

コンスタンティノープル研究は近年大きく進

展した。それを示す国際共同研究＝シンポジウムを紹介しておきたい⁴⁾。

(1) 『コンスタンティノープルとその後背地』(1993年、於オックスフォード。1995年論文集刊行)

(2) 『コンスタンティノープル—都市の構造—』(1998年、於ワシントン・D・C。2000年 *Dumbarton Oaks Papers* 第54号)

(3) 『ビザンツ時代のコンスタンティノープル—モニュメント・トポグラフィ・日常生活—』(1999年、於イスタンブル。2001年論文集刊行)

いずれも研究の新たな展開を示すものであるが、とくに注目されるのは(3)であろう。シンポジウムが現地イスタンブルで行なわれたことにも、研究方法の変化が反映されている。新たな視角と方法に立つこれらの研究は、1)に述べた日本前近代都市史の研究動向にも通じるものがあるように思われる。

3) 第1回研究会において塚田氏は、日本近世都市史研究の「4つの波」を指摘された(氏の報告は本号124~142ページ掲載)。門外漢としては、第4の波は第3の波の余波ではないかとの感想をもったが、それはともかく、日本中世史はもちろん外国史も巻き込んで、新たな「大波」を作り出すことが本研究チームの目標であることは確認されたように思う。

注

1. 塚田氏の序論の他、佐藤信・吉田伸之編著『新体系日本史6 都市社会史』(山川出版社、2001年)も参照。
2. 仁木氏の所論について詳しくは、仁木宏「『御土居』への道」『豊臣秀吉と京都』(日本史研究会編、文理閣、2001年)。
3. 帝都については、川北稔「近世ロンドン史の二つの顔—首都から帝都へ—」『日本史研究』404号、1996年。
4. *Constantinople and Its Hinterland*, ed., C. Mango and G. Dagron, Aldershot, 1995; *Constantinople: The Fabric of the City*,

Dumbarton Oaks Papers, 54 (2000), pp.155-264; *Byzantine Constantinople: Monuments, Topography and Everyday Life*, ed., N. Necipoglu, Leiden, 2001.

塚田報告へのコメント

平田 茂樹

今回の塚田氏の報告を拝聴し、日本の都市社会史研究の進展の早さを痛感いたしました。塚田報告では、日本の都市社会史研究の動向として、90年代までに4つの波が存在し、さらに今後は社会＝文化構造史が第5の波として展開されるであろうと述べていました。しかし、日本の中国近世の都市社会史研究は、せいぜい第3の波にようやく辿り着いた段階ではないかと思えます。

日本の中国近世都市社会史研究を振り返ってみますと、3つの段階に区分することができます。まず中国都市の特徴を西欧の中世・近世都市との比較という観点から解明を進めていった第一段階。具体的には、加藤繁、仁井田陞、今堀誠二氏らが中国での実地調査の成果を踏まえながら商工ギルドについて論じた研究や、市民的自治の誕生の有無、あるいは江南諸都市における都市手工業から近代産業への移行を資本主義萌芽と絡めて論じた田中正俊、西嶋定生氏らの研究をあげることができます。次いで第2段階として、地理学的、人類学的な手法を取り入れながら、都市システムの解明や個別都市を解剖学的に分析した研究などが登場してきます。例えば斯波義信氏は、G.W.スキナー氏の研究を参考にしながら、全国を地理学的観点から八大地域に分別し、さらに中心首府、地域首府、地域都市、大都市、地方都市、中心市場町、中間市場町、標準市場町の八段階の経済的中心地と、(上位の城)帝都、省城、道城、府城・直隸(中央直属)州城、(下位の城)県城・散(県に準ずる地位の意)州城・庁城、この下に位置する大小市鎮からなる行政的中心地とに分類し、その都市の階層構造を元に、両者の連関関係や、経

済・行政両面から進む都市化、定期市の環節構造、及び大商人・紳士エリートが主導する都市の行政システムなどについて大きな図式を提示されています。

現在は塚田報告でいう、都市を生きられた空間として捉え、その社会関係を分析していく、社会関係論的分析の第3段階に入ってきています。ロータリークラブに相当する「善堂」「善会」といった明清時期の市民団体に目を向けた夫馬進氏の研究、あるいは宋代史研究会が進める『宋代社会のネットワーク』、『宋代人の認識』（共に汲古書院刊）といった都市の社会関係構造を具体的な人的結合及びその日常構造、相互認識から捉えようとする研究などが始まっています。

しかし、塚田報告が提示した、分節構造論としての第4の波、あるいは社会＝文化構造史と言った視点はまだ十分に出されておられません。研究者の層の厚さの問題も有りますが、主として研究視角、史料の問題が壁となっています。例えば、中国史は、政治史料については膨大な史料が残されていますが、都市社会史研究を見た場合、その量は必ずしも多いとはいえません。宋代を例に取ってみますと、都市社会史研究を進める史料としては、『東京夢華録』、『夢梁録』といった都市文献史料、『清明上河図』、『平江図』といった絵画・地図史料、碑文などの金石史料、徽州文書といった契約文書、あるいは『夷堅志』に代表される小説・随筆史料などが存在しています。これらは、ある特定の時期、特定の場所については多くの知見を与えてくれますが、残念ながら宋代都市を普遍的に見る上では十分な量とはいえません。これは宋代に限らず、他の時代についても同様なことが指摘できます。また、都市景観の面から言えば、宋代都市の面影を忠実に残しているのは蘇州他限られた都市しかなく、明清史、近代史で試みられているような実地調査を行うこともできません。せいぜい陵墓、遺跡の考古学的調査が僅かに進められている程度で、北宋の首都開封、南宋の首都臨安府（杭州）でさえ、その都市構造がはっきり解明されたとはいええない状況となっています。さらに、建築史と共同で都市空間構造を分析すると言った、日本都市社会史で取られているような学際的な研究も十分進められておらず、まだ

まだ文献研究が中心となっています。

以上のように、日本の都市社会史研究と比べると、中国の都市社会史研究は発展途上の段階に有ると言って良いかと思われまます。こうした研究の発展度合いの差に加え、さらに、斯波義信氏が指摘されているような、中国の場合、農村と都市の区別がしにくいと言った都市の定義の問題、あるいは塚田報告で出されている都市文化の担い手として提起されている「文人」の中国と日本の質的な違い等々、比較都市文化研究を進める上での問題も山積しています。これらの諸問題をどうすりあわせ、共同研究を進めていくかが、これからの課題となっていくかと思われまます。

塚田報告へのコメント

小林 直樹

塚田先生のご報告で取り上げられた諸々の「文化の担い手」の中で、当面の私の関心事は宗教施設（寺院）における文化という点にある。

江戸時代、寺院では檀家・信者を対象として僧侶による説法がおこなわれた。そこで語られた因縁比喻譚（説話）の類は、時には都市の出版文化と結びついて、活字化されることも少なくなかった。

たとえば、17世紀後半から18世紀前半にかけて活躍した、蓮体（河内国出身、真言僧）は、庶民教化につとめた説教者として知られる。彼は畿内はもとよりとして、関東や中国、四国地方にも足を運び、各地の寺院で講経や授戒をおこなった（『蓮体和尚行状記』）。おそらくその折に、豊富な因縁比喻譚を用いて、庶民を教化したと思われる。彼は、そうした因縁比喻譚を集成して、勸化本、一種の仏教説話集を編纂した。『砧石集』（『真言砧石集』）や『観音冥応集』といった著作がそれにあたる。そこには大坂はじめ畿内を舞台とする説話、靈驗譚が多数収載されるが、地方の話も少なからず含まれ、それらは蓮体が地方に説法に出向いた折に、採

集されたものと推測されている。重要なことは、その著作が出版され、彼の説法が、寺院の聴衆のみならず、広く都市の読者に向けて開放されたことである。

上述の『砒石集』は元禄5年(1692)の序をもつが、翌6年には、大坂と京都の三つの書肆の連名で版行されている。蓮体とこの書肆とは昵懇な間柄であったと推定されており、あるいは出版を前提とした著作であったかもしれない。とすれば、蓮体が都市の住民を読者として、ある程度想定して述作を行った可能性もあるだろう。地方の靈驗譚が含まれる点も、あるいは周縁の、未知の世界での不思議に関心を示す都市の読者の傾向と無縁な現象ではないかもしれない(もっとも、本書の読者の多くは、説教ネタを求める僧侶であったと思われるが)。いずれにしろ、本書の中に17世紀から18世紀にかけての都市文化の中に定着を見せていた靈驗譚の姿を認めることは許されるであろう。

一般に靈驗譚は典型的で、骨組みの部分は変化しにくい特性をもつが、近世の都市文化の中で受容される靈驗譚に特色があるとすればどういふものか、興味をそそられる。

実は、『砒石集』は、その書名からも知られるように、鎌倉後期に活躍した無住の『沙石集』の影響を強く受けた著述である。近世においても『沙石集』は盛んに読まれたが、本書は『沙石集』の密教的側面の享受を示す著作としても注目される。本書の靈驗譚の主力は地蔵説話だが、この傾向も『沙石集』のそれを意識しているものかと思われる。蓮体が『沙石集』に範をとっている以上、当然のこととはいえ、両書は実録的説話が大半を占めることでも共通する。この両者の比較によって、近世都市に浸透した靈驗譚の特色を抽出し、それを通して都市の文化について考えることができればと思う。

以上は、寺院における文化といっても、僧侶から庶民への文化の授受という側面に光を当てたものだが、一方、寺院内での僧侶から僧侶への学問の授受、僧侶の学びということにも関心がある。この点で興味深いのは、むしろ無住の方で、彼は尾張に本拠を置きながらも、鎌倉・京都等の諸都市を遊学することで、自己の学問を形成した。殊に、鎌倉五山の一つである寿福

寺においては朗誉、京都五山の一つである東福寺においては円爾という、いずれも栄西門下・栄朝の学統を汲む人物に師事、そこで学んだ密教色の濃い兼修禅は無住の思想に大きな影響を及ぼしている。とりわけ円爾から教授された『宗鏡録』100巻(北宋の延寿の著作、961年成立)は『沙石集』をはじめ、『雑談集』や『聖財集』等の彼の著作に色濃く投影していると考えられるが、その浩瀚と難解の故に、いまだ十分な考察が加えられていない。こうした書物の読解を通して、無住の禅的環境を明らかにし、都市における寺院内部での文化の授受、僧侶の学びについて考えることには大きな魅力を感じる。

第一回研究会コメント及び自身の研究内容について

大岩本 幸次

塚田先生のお話全体に相応してのコメントなどはとても力不足で不可能なのですが、何か言わなければならないということですので、ひとつだけ、お話を聞いておりまして連想いたしました、中国における戯曲研究の動向について少し申し述べさせていただきたいと思います。

岡崎由美氏の報告に拠りますと、中国では1980年代後半また90年代に入って、戯曲史に関する専著の刊行が続き、それらにおいては従来の"宋の戯文一元の雑劇一明清の伝奇"という定型を脱しようとする動きが見られるのだそうです(岡崎由美「戯曲の変遷と内容の変化」『中国通俗文芸への視座』東方書店1998所収)。

背景には改革開放路線に伴う伝統地方劇の復活や、文化史の一部としての戯曲に民族のメンタリティを求めようとする動きなども関係しているとのことなのですが、これによって、戯曲脚本の形式と内容を主要な研究対象としていた状況から、今ある生きた社会の中に伝承される、社会と機能的に関わりを持つ一種の複合的メディアとしての演劇へと対象が捉えなおされ、研究で扱う領域も飛躍的に拡大してきている、

という指摘が岡崎氏の論考にあったように記憶いたします。今回拝聴した塚田先生のお話と考え合わせますと、社会史的観点を取り入れることで従来のパラダイムを乗り越えようとする試みが中国文学の領域においてもあり、現に成果も世に問われつつあるという点、何かしら接点を有しているかに思え、実に興味深いように感じられました。ですから、ただいまの塚田先生の細かい目配りの利いたお話は、中国文学の領域において研究を進める場合にも、視野の拡大や視点の転換を図る上できわめて示唆に富むものであったと私には思われた次第です。何かピントのずれたコメントかもしれませんが、とりあえずこの一点だけ申し上げさせていただきます。

次に私自身の研究テーマについて申し上げたいと思います。私はもともと中国語史を専門にしてきた者で、それに付随して中国古代字書にも関心を持ってきました。今回このチームに参加するに際しましても、明代の「海篇類」字書群についての調査研究を構想しております。「海篇類」というのは、大体16、7世紀に民間書肆の間で競うかのごとく陸續と出版された、内容のよく似た一群の字書を総称して言う言葉で、それぞれ書名に一樣に「海篇」の文字を含む所から名づけられたものです。字書史研究の立場から既に二、三の概括的考察があるのですが、字書史研究に止まらず、都市に於ける字書の出版・流通という観点から見ても独特の価値を有する資料ではないかと個人的には考えています。この「海篇類」に仔細な検討を加えることで、「海篇類」の系統や特色はもちろん、字書の受容や書坊間のネットワーク等についてもその一端を窺うことが可能なのではないかと、期待を寄せているところです。以上です。